〈研究發表および講演要旨〉

【研究發表】

後期大乘佛教における因果論に關する一考察

佐藤　晃

刹那滅論を前提とした場合、業果關係等は如何にして確定し得るのか。インド後期大乘佛教の論師シャーンタラクシタ（Śāntarakṣita, ca. 725-788）及びカマラシーラ（Kamalaśīla,ca. 740-797）は、*Tattvasaṃgraha(pañjikā)*（『攝眞實論（釋）』）において、刹那滅論を前提とした因果關係が確定することを論證し、それを根據として業果關係等は確定すると主張する。本發表では、特に因果の確定要件に關する彼らの見解を、先行する議論を踏まえつつ檢討し、その特徵の一端を明らかにしたい。

『玄覽人鳥山經圖』の成立について

王　皓月

本發表では、梁・宋文明『通門論』に見える「人鳥」や陶弘景『眞誥』卷二十に見える「人鳥五符」、あるいは『玄覽人鳥山經圖』の思想を手がかりとして、道藏本『玄覽人鳥山經圖』の成立の經緯を考察する。

司馬光の「心」について　―佛教（禪）觀との關係から―

田村　有見惠

司馬光が「心」に非常な關心を寄せていたことは既に指摘がされている。しかし、その「心」の概念については、研究の餘地が多く殘されている。また、司馬光の「心」の捉え方と佛教との關係も問題になるが、その檢討も不十分であった。司馬光の佛教に對する立場については先行研究があるものの、そこでは彼を佛教批判者としたり、反對に佛教受容者としたり、見解は一定していない。當時は禪が流行し、また道學は形成の途についたばかりであった。その當時における司馬光の思想的位置について、「心」を中心に分析する。

王安石の思想における「神」の意義について

梶田　祥嗣

王安石は「致一論」などの論考において、しばしば最高の境地を「入神」という語で表現する。「神」はおおむね聖人の靈妙さを形容する語と解釋できるが、「入神」の意味については明確に判然し難い。ただ、「入神」に付隨する「無爲」や「聖」といった概念との關係から、「入神」には單に靈妙さを形容する意の他に、別の思想的意義が含まれていると思われる。以上の觀點から本發表では「神」の思想的意義について檢討を行う。

懈慢界の源流と展開

高田　文英

懈慢界は、諸經典のなかでも竺佛念譯『菩薩處胎經』卷三「八種身品」のみに說かれ、阿彌陁佛の無量壽佛國の途中にある樂しみに滿ちた世界とされる。この『處胎經』の懈慢界は、〈無量壽經〉の疑城胎宮に素材を得たものと推定されるが、その說意には、〈無量壽經〉の疑城胎宮とは異なるものが見られる。本發表では、『處胎經』に懈慢界が說かれた原意を檢討するとともに、その後の解釋の歷史をたどる。懈慢界は『處胎經』の意圖とは異なるかたちで、再び〈無量壽經〉の疑城胎宮說へと接近し吸收されていくのである。

李塨の立場　―顏李學派の再考のために―

伊東　貴之

李塨（恕谷）は、清朝初期のやや特異な思想家・顏元（習齋）の弟子として知られ、專ら師說を顯彰し、その普及に努めたことから、一般には、彼の繼承者として認知され、回顧される存在である。思想史上、顏李學派といった呼稱が通行する所以でもある。しかるに、兩者の思想の間には、かなりの徑庭があり、復古的で原理主義的な志向の强い顏元に對して、李塨の場合、むしろ概ね穩健な主張が、その思想の基調となっている。從來の評價の再檢討と同時に、考證學などとの交差、それらを繫ぐ補助線について、少しく私見を纏めてみたい。

【講　演】

ペドロ　ゴメズの『講義要綱』の和譯(一五九五年)と日本の宗教

ジラール・フレデリック

西洋の宇宙論、哲學―取り分けアリストテレスの靈魂論―、神學の概要を宣教的な目的で紹介した『講義要綱』の和譯の原稿が十五年前に發見されて學會に大きな意味の資料を提供したと言える。但し、その文獻が公になっても充分に研究されているとは言えない。イエズス會の宣教師が目指したのが、日本の宗教、考え方、習慣に適應しながら、キリスト教の教えている宗教的な要點―靈魂不滅論、善惡の報謝、自然界に於ける人間存在の位置と意味等―を通用させることであった。キリスト教の基礎概念を說明するのに、日本の宗教、特に佛教用語の使用禁止があったにしても、紛れもなく、佛教用語、或は現地宗教の考え方を使用せざるを得ない場合がかなり多いことに氣がつく。そういった特色に着目して『講義要綱』を資料的に扱い、日本の宗教とのかかわり合いがどうであったのかを述べようと思う。